

令和二年度 公益財団法人納税協会連合会会長賞

「納税者としての意識」

帝塚山高等学校 一年 鈴木 琴絵

私の家は五人家族です。私を含め家族みんなよくご飯を食べます。特に白ご飯の消費は尋常ではなく、母は毎週5キログラムの米袋を買っています。しかし、最近自宅に米袋が届き、母がしばらく買わなくていいねと言いました。どういうことか聞いてみると、ふるさと納税をして、福島県の自治体からお礼として送られてきたそうです。

ふるさと納税とは応援したい自治体に納税者が寄付をできるという仕組みです。これは国にとっては地域産業の発展が見込め、地方自治体は税収の増加による自治体運営の健全化ができます。また納税者は応援したい地域に支援をすることができます。私の家も東日本大震災の復興を願って福島県に寄付をしたそうです。このように、ふるさと納税は良いことがたくさんあるように見えます。しかし最近では問題点も見つかってきています。

それは、ふるさと納税の活性化による問題点です。近年、寄付をする人は多くなってきています。しかし、中には、寄付金が何に使われているか、寄付金がどの自治体に行くかを知らずに寄付している人も増えてきています。つまり、応援したい地域に寄付をするという本来の目的ではなく、お礼の品と節税目的の人が増えてきているということです。また、住民がほかの自治体に寄付してしまうことにより、納税額が減ってしまうという問題点も出てきています。

このような問題点を解決していくにはふるさと納税の目的の見直しが必要であると思います。ふるさと納税の本来の目的とは、税収格差を狭め、国や地域を活性化していくことです。とても、快活で名案なシステムであると思いますが、それを生かしていけるかどうかは、私たち納税者にかかっていると思います。近年、住む地域への意識が薄れていっているように思われますが、積極的に地域へ関心を持つことも大事であると思います。そして、国や地域つまり私たちの生活をいかに豊かにしていくかは、私達納税者にかかっているということを私は、ふるさと納税を通じてとても感じさせられたように思います。